

草津温泉 2018 春夏秋冬



2018年4、8、10月、2019年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

群馬県の草津温泉に、夫婦で一週間の滞在旅行に行ってきた。毎日何回も名湯に浸かり、食べ歩きや街歩き、文化や歴史を知るといった体験の旅を満喫する。会う人からは一週間も良いですねと言われ、優越感とワクワク感満載の旅は春、夏、秋に続き冬の章を追加する。

序章 事の始まり

■長期滞在旅行

私がかねてよりその土地の歴史や人々の生活を体験するには1泊や2泊では物足りないと考えていた。本当は住むのが一番良いのだが、そうすると旅ではなくなってしまう。私の中では旅はあくまでも「非日常への空間的な移動」という定義をしているからだ。

そこでその土地を体験できる方法として長期滞在旅行というものを提唱していた。期間はおよそ1ヵ月として、地元の食材を調達して料理して食べ、あるいは地元の食堂を食べ歩いて生活をする。

そこを拠点に周辺を探訪するのも良とするもので、観光だけではなくイベント参加やスポーツ等とことんその土地を体験する。避暑や避寒を兼ねることもでき、国内に限らずに海外の都市という選択もある。

およそ1ヵ月の滞在旅行は滞在費用10万円を目安に企画している。候補地として具体的には冬の沖縄石垣島、夏の北海道釧路などである。そして草津温泉もそのひとつである。

■まずは一週間

草津温泉に1ヵ月間というと、季節はいつが良いのか。草津温泉は標高1200mで夏は涼しい避暑地だ。しかし温泉の温もりを存分に感じるならば冬も良い。さらに紅葉の秋、桜の咲く早春、新緑の初夏と選択肢は多すぎる。

そもそも1ヵ月間それも連続にこだわる理由はあるのだろうか。あえて言えば沖縄や北海道、海外という交通費が高く、時間がかかるので頻繁に行けないということぐらいだろう。

草津温泉は首都圏から近い。そうならば何も1ヵ月連続に限定することもない。目的はその土地を体験することなので、春夏秋冬で各一週間ずつではどうだろうか。そう、まずは一週間だ。

第一章 春の一週間

■ハッ場ダム

群馬県の渋川から草津に車で行く途中に建設中のハッ場ダムがある。ハッ場を「やんば」とは地元民でもなければ普通読めないが、2009年の民主党政権発足時にこのダムの建設中止がニュースになったので名前は全国区に広がった。

一時は中断していた工事だがその後再開されて、現在はダム本体の形がわかる程度にまでなっている。

このダムは完成すれば巨大なダム湖が出来るので、ダム湖に沈む多くの家や道路、JRの駅や線路まで移転している。究極は河原湯温泉という温泉街全体も移転している。旅館群は上流の高台に移転して既に営業している。

この一帯は全く異なるものに生まれ変わろうとしている。



ダム建設の是非は別として、大規模な開発事業の途中の姿は是非見て頂きたい。

それは人類が自然に対して闘いを挑んでいるかのように私には見える。分野は異なるが技術者だった私には応援したい気持ちもあれば、こんなに作り変えてよいのかという恐れ多い気持ちも

ある。その性質や規模からいえば「作り変える」ではなく「造り替える」と書く方が良いかもしれない。地球が造った土地・景観にとって代わるものを造ろうとしている。

当たり前の話だが、出来上がってしまうと途中の姿はもう見る事が出来ない。

■泉質主義

「草津温泉は万病に効く、治らないのは恋の病だけ。」というのが、古くからの草津温泉のキャッチコピーだ。その理由は強酸性なので殺菌力が強く、さらに湧出温度が高いので時間湯などの独自の入浴法が生まれ伝わっている。

酸性度を表す水素イオン濃度 PH が 1.8 前後という。PH 7 が中性、数字が小さくなるほど酸性度が高くなる。人間の胃液が PH3~4 なので草津温泉の PH1.8 は極めて酸性度が高い。

5 寸釘を草津の温泉に浸けておくと一週間で無くなる程で、この中では細菌や雑菌は生きていけない。従って殺菌作用抜群で外傷に効果がある。

この源泉の泉質を維持するために草津温泉では泉質主義を貫いている。それはどこの宿でも共同浴場でも、湯が熱いからといって決して水で薄めることはしない。

高温の湯を冷ますために昔からさまざまな工夫をしている。湯畑では高温の湯を階段状の木の通路で外気にさらして長い距離流すことで冷ましている。また、湯もみは高温の湯をかき混ぜて温度を下げるためのものである。

それらが草津温泉を代表する名物になっているから面白い。

■草津の中心は湯畑

草津の街では、ホテルや旅館が湯畑を臨む場所に建っている。昔から草津温泉の中心は湯畑だ。この湯畑に浴衣姿で繰り出して、飲食や土産を物色し、共同浴場の湯めぐりもできる。だから人々が湯畑に集まり、湯畑を中心に活気が溢れている。



ところが世間一般のさびれた温泉地では、景色の良い一等地に大型ホテルを建てそのホテルの収益を上げるためにホテル内に飲食店や売店、エステ、アミューズメントなど全てを用意する。そのために宿泊客はホテルから出ないで済んでしまう。そうするとやがて温泉街に人が出なくなり、温泉街全体に活気や魅力がなくなる。その結果、大型ホテルにも宿泊客が来なくなる。これが最近見かけるさびれた温泉地の姿である。

湯畑を現在のひょうたん型にして周囲に柵や歩道を配し、人々が集まれるようにデザインしたのは芸術家の岡本太郎だ。この湯畑が草津温泉の価値を高めているのは言うまでもないだろう。

「芸術は爆発だ！」という岡本太郎の言葉は有名だが、私は芸術とはキャンプファイヤーの燃え盛る火のようなもので、人々の心の拠り処になり得るものだと強く感じる。それは大阪万博の「太陽の塔」のようなもので、音楽や絵画など芸術一般にも言えることだろう。

湯畑の周りの柵には草津温泉を訪れた戦国大名、政治家、芸術家、俳優などたくさんの著名人の名前が刻まれている。名前と肩書、そして来草した年が刻まれている。来草とは草津温泉にやって来たという意味で世間ではよく使う表現だが、小さな温泉街で使われるのは珍しい。さすがに草津だと感心してしまう。

その中に最も新しく珍しい名前を発見した。その名は「ルシウス・モデストゥス」、肩書は「テルマエ設計技師」で平成 26 年来草と記してある。最も近年の来草だが、最も古い古代ローマ人だ。

映画「テルマエ・ロマエⅡ」で阿部寛演じる主人公のルシウスがタイムスリップして草津に現れたことで刻まれたもので、その遊び心が実に楽しい。



草津は人口約 6000 人の小さな街なのに活気がある。湯畑周辺に集まるのは中高年や家族連れだけではなく若者も多い。スポーツも盛んでスキーの荻原兄弟を輩出し、ウィンタースポーツ以外にも Jリーグのチームまで持っている。

■宿は現地で探せ

草津温泉には旅館協同組合に加盟している宿だけでも 100 軒以上あり、高級旅館も含め実に選択肢が多い。私も過去に数十回と来ているのでいろいろな宿に泊まっている。最近是有名老舗旅館の「草津ホテル」を利用していたが、今回は長期滞在旅行ということで価格を抑えることに重点を置き、今後の滞在を視野にいれて宿選びを行う。

とは言っても予約なしでいきなり訪れるのは不安なので、事前に 4 泊分は予約しておいた。そして残りの 2 泊は現地で探すことになる。

バスターミナル近くの旅館協同組合の窓口何度か通う。長期滞在に向きそうで、かつ面白そうな宿を紹介してもらう。

お陰で窓口の女性とはすっかり顔馴染みになり、逆に草津以外の旅行地や海外のことも質問されるという状況が生まれた。旅のチカラ研究所の面目躍如だ。

紹介してもらった宿を訪れて部屋や大浴場を見せてもらう。小さな宿では事前訪問や価格交渉は絶対にした方が良い。それも宿泊価格を決められる宿の主人が相手だ。

じゃらん、楽天などのインターネットの予約専用サイトから予約すると結構高い紹介料を払うので、宿にとっては直接予約がありがたい。値引きの余地もできる。

私が好意にしている宿の主人から聞いた話ではインターネットよりも電話予約の方がありがたいという。それは宿にとってはどんな人が泊まりに来るかが分かることは重要なのだという。インターネットは便利だが人となりが分からない。

だとすると、できれば電話よりも直接訪問して顔を見せて言葉を交わすことが双方に安心感が生まれる。ただこれを追い求めると文明の利器を全て否定することになる。

訪問予約がベスト、電話予約がベター、インターネット予約がグッドというところだろう。

■めっちゃ安い宿

私たちが最初に泊まったのは「ペンション・マイウエー」。草津の中心の湯畑から徒歩 10 分ほどとやや不便なので、そのために安い。この宿は 2 連泊で電話予約しており、今回はいろいろ体験したいので 2 泊はそれぞれ夕食朝食付きと素泊まりを試すことにしてある。

部屋は和室も含めて 8 部屋あり、私たちはツインの洋室に泊まった。

風呂は男女別の浴室で、夕食後は予約制の貸切り風呂になる。カップルを意識した宿の戦略なのだろうが、何時でも気ままに入りたい私にとってはあまりありがたくない。ただこの時期は宿泊客が少ないので、その心配は無用だった。

夕食も朝食も、質も量も充分で納得感のあるものが出てきた。帰り際に宿の主人と名刺交換をして会話を交わし、私が「安くて内容も良い」と宿をほめると、彼は「うちの場合は価格で勝負するしかない」と言う。立地条件や施設面でも致し方無いらしい。

しかし夏は学生の合宿で満室になるという。密集地でないので騒いでも問題なく、庭で BBQ もできるので学生の合宿には向いている。何よりも草津は標高 1200m なので夏は涼しい。そして冬はスキー合宿だ。

宿というのは宿泊客のターゲットをどこにするかで戦略が決まる。逆にその戦略が分かっているならば、泊まる側も戦略を立てられる。そう、学生の来ない時に格安で中高年の合宿ができる。



素泊まり 2500 円、2 食付き 5500 円という驚きの価格で、最近の言い方をすれば、めちゃ安い宿だ。

■ 格安ホテルグループ

格安で有名な関東のホテルグループ「おおりグループ」の宿「草津おおりホテル」にも連泊する。このホテルグループは経営難に陥った比較的大きなホテルや旅館を安く買い取り、独自のノウハウで再生する。だから驚くほど安い。その上で首都圏から格安送迎バスも、夕食時にはアルコール飲み放題も付いているから凄い。

鉄筋コンクリートだが建物や設備は老朽化しており、食事が付いた湯治ホテルという言い方が的確を射た表現かもしれない。価格も 2 泊 4 食付で 11000 円は凄い。

食事はいわゆるバイキング、つまり食べ放題だ。バイキングはもともと食べ放題の意味ではないが、日本で初めて食べ放題を採用したレストランの店名がバイキングだったので、その方式が店名で広まったと聞いている。

だから海外では全く通用しない。海外では英語で食べ放題を意味する **all you can eat** と表記した看板はよく見かける。あるいはビュッフェという表現も使われるが、これはフランス語 **buffet** がもとの、食べ放題というよりもパーティ等で使われる立食という意味合いが強い。

夕食会場では実にさまざまな人たちが食事をしている。こういったホテルに泊まると私たち夫婦は人間ウォッチングを楽しむことが多い。

総勢はざっと 80 人、年齢層はほとんど中高年だ。その中で 20 人くらいの団体会場の一角で盛り上がっている。ひとりで食事を取っているのが 10 人くらい、私はその割合が多いのにびっくりしていると妻が「あの人は癌治療で来ている人で、あちらの人は湯治で 2 ヶ月毎に来ている人」などと解説し始める。風呂で会話を交わした成果らしい。

ひとりでは寂しいとか可哀そうとか私が勝手に思っただけで、ひとりで来ている人はおそらくは明確な目的を持っているものだ。

■元独身寮の湯治ホテル

湯治ホテル「こしゆり」は元独身寮ということなので、ビジネスホテル風の宿だ。建物は比較的新しく、清潔感もある。その生い立ちから風呂は共同で大きめの浴槽、もちろん名湯草津の温泉だ。部屋は洋室、和室があり基本ひとり部屋でトイレ、簡易キッチン、冷蔵庫、電子レンジがあり自炊可能ということで湯治ホテルと名付けたようだ。

バスターミナル近くで隣にはスーパーマーケットや総菜屋もあり、便利な立地条件になっている。自炊しながら安く泊まるには好都合だ。

ホテル1階にはそば屋も併設されており、そば以外に旅館で出てくるような夕食・朝食も頼むことも出来る。

費用は素泊まり1人5500円。面白いのは長期の部屋借りができて、ひとり用の部屋で5万円、2人用の部屋なら10万円で1ヵ月間借りられる。長期滞在旅行にちょうど良い。

私たちはツインベッドの洋室に泊まり、スーパーマーケットで地元産のうどんや舞茸の天ぷらなどを買って込む。群馬はうどんが有名で、それも煮込みうどんが特徴だ。群馬県出身の妻がさつと調理して美味しくいただく。

しかし、何か面白くない。

夫婦2人で小さなテーブルを囲んでうどんを食べながら感じることは、これでは家にいるのと同じ変わらないということだ。たまに会うカップルならば非日常だが、私たちにとっては完全に日常生活になっている。

もともと湯治というのは、農閑期に心身の疲れを癒すために温泉宿に泊まって湯に浸かり、そこに集まった人々との交流を深めるというものだ。自炊はあくまでも滞在費用を安くあげるため、湯治＝自炊は何となくのイメージだろう。



■おしゃれな宿

湯畑からほど近い場所に、「佳乃や」というちょっとおしゃれな宿がある。モダン和風の内装やインテリア、スポット照明を用いて落ちつきある宿を演出している。支配人に聞くと5年前に古い旅館を改装したという。改修費用は結構かかったように見える。

宿泊客のターゲットは外国人、そして日本の若い女性やカップルといったところだ。英語表記の案内が至るところにあり、スタッフには外国人もいる。

1泊朝食付き、外国では馴染みがあるB&B (Bed&Breakfast)だ。そして心をくすぐるサービスとしてロビーではコーヒーやジュース、アイスキャンデーが無料提供されている。

支配人の話では評判がいいので、同様な宿が近辺に増えているという。草津のように飲食店が多くある場所では B&B も良いのだろう。美味しい食事の提供は宿にとって差別化をはかる良い機会である反面、負担でもある。宿は負担を軽減でき、宿泊客にとっては食事の選択肢が増える。



この宿は人間に例えると少年期か青年期だろう。宿を大規模改修して新しく商売を始めたばかり、これから投資した分を取り戻すという雰囲気宿から伝わってくる。

その例えからすると老朽化した施設や設備をそのまま使う宿は、余生を如何に過ごすかという中高年期かも知れない。

そのようなエネルギーの違いを感じながら泊まるのも面白い。

この宿には数日前に訪れて部屋や大浴場を見せてもらっている。価格交渉して 12 畳の和室を 2 人利用でひとり 6000 円にしてもらった。

■温泉番付表

日帰り入浴施設「大滝の湯」に行くと合わせ湯という面白い湯がある。湯船が 5 つあり、およそ 40℃から 46℃の温度の湯を楽しむことができる。さらに食事処や休憩場所もあり、草津の湯をゆっくりと楽しむことができる。

施設内でくつろいでいると温泉番付表という大きな看板が目にとまった。この類の番付表はいろいろな場所でよく見かけるが、これはかなり古い。

東の大関は上州草津温泉、西の大関は摂州有馬温泉と書いてある。最高位は大関で横綱は番付にない。この時点でもはや江戸時代だろうと感じる。

相撲の世界で、番付表が出来たのが江戸中期 1757 年という。横綱が番付表に登場するのは更に後で明治になってからだ。地名が上州や摂州と書かれており、明治政府が廃藩置県を行ったのは明治 4 年の 1871 年のことだ。以上のことからこの番付表は 1757 年から 1871 年の間で、おそらく江戸時代後期と思われる。

個々の温泉を見てみると、最上の高湯とある。最上とは今の山形の一部、高湯は蔵王温泉の昔の名前である。高湯温泉は戦後の 1950 年に観光地百選で選ばれてから蔵王温泉に名前を変えた。

現在の温泉番付では常連の箱根温泉がない。江戸時代は箱根に関所はあったが箱根温泉という概念がなかったので相州湯元、相州塔ノ沢、相州宮ノ下となっている。箱根全体が観光地として開発が進んだのは戦後で、小田急と西武がしのぎを削って開発した結果だ。

第二章 真夏の一週間

■避暑と湯治

今年の夏は異常気象ということで40℃に迫る猛暑の連続になっている。埼玉県熊谷市では日本記録を更新し41.1℃を記録した。

草津温泉の標高は1200mなので下界に比べると相当に涼しいはずであるが、今年はそうでもないらしい。何しろ避暑地で有名な軽井沢でも避暑にならないという。草津は軽井沢よりも標高が200m高いので軽井沢よりは涼しいはずである。

実際、今回泊まった宿の主人の話では、草津でも今年は最高30℃にもなったという。標高が100m上がると気温は0.6℃下がるので単純計算をすると草津は下界よりも7.2℃は低い。下界が40℃近いのだから、ここ草津でも30℃越えも理解できる。

ただ30℃というのは日が当たる日中の暑い時のこと、実際には直射日光を遮れば高原の乾燥した空気なので日陰は過ごし易い。そして朝夕は涼しいというのが実感だ。

やはり避暑にも草津だ。高原の温泉地の新たな可能性がここにある。

■私好みの宿

今回の1泊目は湯畑まで徒歩1分もかからない好立地の旅館「小泉屋」に泊まる。ここは部屋が5つしかない、とてもこじんまりした旅館だ。

木造2階建ての建屋はとても風情があり歴史を感じる。木造といってもベニヤや合板ではない、ましては木目調の壁紙を使っているのとは訳が違う。一枚板を使用しており、それも意識して多く使っている。女将さんに聞くとこの建物は築30年、ちょうど木が馴染んだ頃になる。

私は旅館の評価基準のひとつとして廊下の雰囲気重要視しているが、存分にその期待に応えてくれている。



湯畑に近いので引いている源泉は湯畑源泉で、草津の宿で万代鉦（ばんだいこう）源泉を引いている宿が多いが、湯畑源泉も私好みだ。

小さな浴室が2つあり、昔は男女別になっていたのだろうが、現在は空いていれば中から鍵かけて入浴する貸し切り風呂になっている。最近はこの類の宿が多い。

貸し切りばかりで風呂に入れないことを心配したが滞在中にそんなことは一度もなかった。
それにしてもこの宿、1泊2食付きで1人8000円は安い

■この街は本当に面白い

草津という街は古くに開湯して1500年以上も色々な人々が温泉を訪れることによって繁栄している。ということは常に新しいものを上手く取り入れて進化しており、そしてそれが伝統となっていく中で独自の温泉文化を築いている。

例えば人口6000人の町なのに「ザスパ・クサツ群馬」というサッカーチームもある。このチームは昨年までJ2リーグ、つまり全国区のチームだ。リーグ優勝した時には「ビール掛け」ではなくペットボトルの「温泉掛け」をやるのがとても面白い。これもひとつの伝統文化になっていくのだろう。

ノルディック複合の荻原兄弟をはじめ多くのオリンピック選手も出している。関係ない話だが荻原兄弟の実家はバスターミナルの近くにある金物屋だ。

白根神社近くを散策しているとちょっとした公園に相撲の土俵があり、隣には相撲研修道場という立派な建物が建っている。

私は何十回も草津に来ているが土俵はともかく研修道場は初めて見る。土俵は街の人々が使っているのだろうが、研修道場は日本相撲協会のものなのできっと大相撲の力士が温泉に浸かりながら稽古しているのだろう。

この街は本当に面白い。

■人間ウォッチング

今回も「草津おおりホテル」に宿をとっている。このグループの宿はとにかく格安なので人気が高く、いろいろな人が泊まっている。

そんな中で6~7人の外国人の一行に目が留まった。ちょっと太った白人の中年男性、東南アジア系の中年女性、同じく東南アジア系の若い男女、中国人風の年配の女性、そして白人と東南アジアの混血のような少女たちという一行だ。いったいこの多国籍グループな何なのだろうと妻と人間ウォッチングに盛り上がる。

そしてこの白人の中年男性の行動には思わず驚くというか、納得してしまった。宿の食事はアルコールも含めた飲み放題・食べ放題のバイキングになっている。一般的な日本人は料理を取るところに並んで、一通り料理を取ってからテーブルに料理を置き、それからドリンクを取りに行く。

ところが、彼は最初にグラスワインを取って、そのワインを持ったまま料理を取りに行っている。欧米人らしく、まずワインという発想なのだろう、実に面白い。

その彼と話をしたら、彼はノルウェー人、奥さんはタイ人だという。そしてあのグループは彼の家族という。ううん、どう見ても関係が理解できない。誰が奥さんで、あの若い男は、そして中国風の年配の女性はどういう関係なのか。ひとりずつ聞くのも気が引けたので、謎のままにしておこう。

もう1組、不思議な親子らしき2人がいる。父親らしきはスキンヘッドの中年のおじさんで、息子らしきは高校生くらいの内気な感じがする男の子だ。

この親子らしき2人は、私たちの隣のテーブルに座っているが、ほとんど会話をしない。15分もしないうちに食事を終えて2人とも席を立ってしまった。一体何をしに草津温泉にやって来たのだろうか。

■街はお祭り

8月1日と2日は草津温泉の祭りで街は賑わいを見せている。その祭のために宿が取りにくかったが、正直言ってこんなに感動的なものとは思わなかった。どこでもやっているような客よせや町興しの祭りかと、タカをくくっていたのだが、それはとんでもないことだと分かる。

祭りは「草津温泉感謝祭」と呼ばれるので、温泉という大自然の恵みに対して街の住民たちが、観光客をも巻き込んで街が一体になって感謝の気持ちを表すというもので、まさしく古くからの温泉への原始信仰そのものだ。

もちろん主催者にしてみれば観光客を呼ぶことも念頭にはあるのだろう。そのために2日間の祭を盛り上げる様々なイベントが催される。数日前から湯畑の広場では複数の大道芸人を招いて盛り上げている。



■無料コンサート

有名歌手を招いた「ふれあい歌謡ステージ」が草津町総合体育館で開催とあり、無料と聞いたのでもちろん見に行ったが、多くの人が集まっている。ざっと数えると1000人は超えている。

このコンサートはNHKのFM放送の公開録音ということで基本はNHKがやっているのだろう。会場費は自前だろうし草津町の費用負担は相当に低いと想像できる。うまく公共放送を利用したなど拍手を送りたい。

私が滅多に聞くことがない北山たかし、増井山太志郎、北見恭子、北原ミレイ、橋幸夫などそうそうたる歌手の歌を生で聞くことができる。

隣に座ったおばさんに何処から来たかを聞いてみたら、同じ群馬の高崎ではあるが地元民ではない。このコンサートを見に毎年来ているという。



増井山という相撲取りは歌が上手かったことは知っていたが、プロ歌手になっていたことは知らなかった。ましてはその彼の歌を草津温泉で聞けるとは思わなかった。それにしても大関までいった力士が引退して角界に残らずにプロ歌手になるとは人生何があるか分からない。

■見てはいけないもの

ハプニングは北見恭子の最後の曲で起きた。彼女が2コーラス歌い終わったところでお辞儀をして舞台の袖に戻ろうとしたのだ。ところが音楽は続いている。司会者が慌てて出てきてその場をとりつくろっている。北見恭子も困っているようだ。

司会者が何やらスタッフと話合っている。そして結論が出たらしく、次のように説明し始める。

「皆さんは見てはいけないものを見てしまったのです。実は時間の都合により2コーラスで終わらせる予定になっていましたが、スタッフが間違えて3コーラスの音楽を流してしまいました。歌手の高見さんは2コーラスの場合は、1番と3番を歌うので2コーラス目に3番を歌ってしまったので3コーラス目に歌えなくなってしまったというものです。もう一度歌ってもらいますので、ここに居る皆さんはラッキーだったと思ってください。」

なるほど、そう言うことか。

このことで色々分かったことがある。2コーラスで歌う場合は必ずしも1番2番ではない。プロ用のカラオケ音楽は2コーラスや3コーラスなどいくつかバージョンがあること。歌手は1番3番2番という順番では歌えない。

見てはいけないものではなく、滅多に見られない面白いものを見せてもらった。

■温泉女神

温泉感謝祭のメインイベントとしては、温泉女神が天から草津温泉に降りてくるという降臨、そしてその温泉女神が源泉をくみ上げてそれを各施設や共同浴場に温泉を配るという献湯、役目を終えた女神が天に戻るという昇天の各儀式がある。

女神は1日目の夜に降臨する。降臨場所は湯畑の広場から延びている光泉寺へ登る階段の上だ。湯畑は草津温泉の中心地なので夜でもライトアップされており、さらに周りの食堂や旅館・ホテルの照明、祭りなので屋台も多く出ている。その屋台の照明も含め、全ての照明を消して真っ暗な世界を演出する。

明かりを失った街の中心の夜空には満天の星が輝いている。住民も観光客もこの星の多さと輝きにも興奮している。今年がちょうど火星大接近の年なので、ひときわ明るい火星も目に留まる。

それら満天の星の見守る中、光と共に女神がその姿を現す。女神には多くの御付きの者が随行するので、盛大できらびやか、かつ威厳がある。それは若い女の子の巫女たちや、白丁と呼ばれる若い男の子たちの役目になる。この祭りには地元の子供たち、若者たちが積極的に参画している。そしてそれを支え、あるいは指導している大人の姿も見逃すことができない。

女神は毎年地元の女性が選ばれるという。このような感謝祭が、現在の形になったのは終戦の翌年の1946年という。年に1回降臨し昇天するので年に1回限りの役回りには、毎年違う女神が選ばれる。今年の女神は第73代目を名乗っている。

女神はいかにも清楚で美人である。この女神見たさに皆集まって写真を撮っているほどの人気で、私も当然のように至近距離で写真に収めたが確かに美人だ。そして若い。

街の中では「今年の女神は△△地区の〇〇ちゃんが選ばれたと、あの子はベッピンだからな」という会話が聞こえてきそうだ。選考基準は明らかではないが、容姿はもちろんのこととして、処女も条件なのだろうかなどと余計なことまで考えてしまう。



■女神昇天

クライマックスの女神昇天は実に荘厳で神秘的なものだ。その神秘の世界を演出するために昨夜と同様に湯畑周辺は街をあげて照明を落としている。

今朝、旅館の風呂で一緒になったおじさんが、女神の降臨も素晴らしいが降臨よりも昇天の方がはるかに良いと私に熱弁をふるっていたことを思い出した。このおじさん、かなりの草津通らしい。その教えに従って、私たち夫婦は光泉寺の階段が見えるベストポジションに陣取る。

真っ暗な湯畑から寺の石段を登って昇天する様は実に素晴らしい。

白丁役の男の子 20 人くらいが松明を持って二手に分かれて、両側から松明の明かりで道を作り、巫女を従えた女神が階段をゆっくりと 1 段 1 段登る。白丁役の男の子の足さばきは、右足を右 45 度方向の外側に運び、次は左足を左の外側に 45 度方向に出して、また右足をというようにジグザグにゆっくりと前に進める。そのゆっくりさがとても幻想的に感じる。

それらの動作に合わせて音楽とナレーションが湯畑一帯の広場に響く。いやその逆でナレーションが誘導しているのかもしれないが、いずれにしても音と光と女神一行の所作が一体になっているので、映画でも見ているような気分になる。

この音楽とナレーションを放送しているのは湯畑近くの 2 階建てビルの屋上のテントの中で、いかにも地元の人という面々が慣れない作業に奮闘している。手作り感満載の祭りを感じさせてくれるが、その出来栄は称賛に値する。

ついでに言うと、そこのビルはかつてストリップ劇場だったビルだが、今は残念ながら(?) その劇場は廃止になり、射的やスマートボールの遊技場になっている。



女神が天に昇る、つまり光の中に消えるという演出が凄い。雲のような霧か煙の中に、まぶしい光とともに女神が消えていく。

この様子を詳しく書こうかと思ったが、ここで詳細を書いたら来年以降この祭に来た人の感動を小さくしそうなのでやめておく。感動とは予想を超えるほど大きくなるので、ここでネタ晴らしをしない方がよからう。

とにかく人口 6000 人の街の演出とは考えられないということは言うておこう。恐らく地元民みんなが毎年創意工夫を加えて今年に至っているのだろう。

私もいろいろな日本各地の祭りを見てきたが、この独特な雰囲気や街の人々の祭りを成功させようとする一体感が伝わってくる祭りは経験がない。それは心の底から温泉に感謝して、みんなでこの草津温泉を発展させていこう気持ちの表れなのだろう。とても新鮮で感動する。

私も珍しく興奮している自分に気が付く。周りに居る群衆の絶賛の声が聞こえてくる。凄い、身震いをしたとか、口々に言っている。感激で涙も流している人もいる。

何故この祭りはあまり宣伝されないのか。不思議な気もするが、私の中にはあまり有名になって欲しくない気持ちもあって複雑だ。

ただしこの旅行記を読んだ方は是非とも見に行つて欲しい。そして私も来年また女神に会いに来たい。

■心がざわめく、キャンピングカー

草津天狗山スキー場の隣の駐車場にはキャンピングカーが多く停まっている。キャンプ場でもないのに勝手に駐車して泊まっているのだろう。

その中で、とんでもなく面白い車が私の目に留まる。軽トラの荷台に 2 畳間程の小さな木造の家を建てたようなキャンピングカーだ。通常のキャンピングカーは改造車なので 8 ナンバー登録するのが一般的だが、この車のナンバープレートは黄色の 4 ナンバーなのでキャンピングカーではなく、最小の木造の家を軽トラに乗せて走っているという代物になる。



この車を見て、私の心にざわめきが起こった。

昔からキャンピングカーが好きで、キャンピングカーを借りて家族で北海道を旅したこともある。もちろん購入も何度も考えたが、残念ながら実現には至らなかった。

このタイプならば実現性が高く、木工好きの友人となら一緒に作れそうだ。作った後にはそれに乗って旅行、そしてレンタルや販売という事業にも発展できそうだ。

帰りの車の中では妻とそんな話で盛り上がり、無限大に夢が広がる。

■2度目の一週間滞在の記録

今回の草津滞在旅行は2108年盛夏の7月29日(日)から8月4日(土)の6泊7日になる。高速道路の休日割引のかかる日曜日出発の土曜日帰宅という行程だ。

1日目の宿は「小泉館」で1泊2食付き1人8000円。税金を含め2人分17580円。

2泊目と3泊目は「草津おおりホテル」連泊で食事付全て込み2人分22200円。

4泊目は今春にも泊まった「佳乃や」で朝食付き2人分11200円。

5泊目と6泊目も「草津おおりホテル」連泊で食事付全て込み2人分22200円。

宿泊の総費用は夫婦2人で73180円になった。その他食費とアルコールで約8000円、交通費約8480円(高速道路5480円+ガソリン代約3000円)で合計約90000円、春の一週間滞在旅行とほぼ同じ費用になった。

1ヵ月間の滞在ならば2人で多分40万円になる。目指している長期滞在旅行の費用としてはかかり過ぎかもしれない。

第三章 秋の一週間

■作戦変更

草津は春夏秋冬のどの季節が一番良いかと群馬県在住の友人たちに尋ねると紅葉の秋と答える人は多い。確かに紅葉と温泉というのは相性がよさそうだ。

しかし残念ながら私たちが今回滞在した10月初旬は紅葉の盛りには少し早かったようで、いかに標高1200mの草津温泉でも色づき始めてはいるもののまだ少し早い。

気を取り直して作戦を変更する。この長期滞在旅行の企画は滞在拠点周辺を探訪するのも良とするものなので、草津温泉の更に奥の方のもっと標高の高い場所を目指すことにしよう。

ところがまた残念な話になるが草津から白根山に行く国道292号線は火山活動のためにロープウェイの麓駅のところで通行止めになっている。2018年1月に白根山が噴火した影響でこの道路が閉鎖されている。それだけではなくロープウェイは復旧の目処が立たず廃線が決定している。施設が噴火で大打撃を受けたので復旧には多額の費用がかかり、そんなに費用をかけても火山活動で運転できるのかという心配が払しょくできないのでやむを得ない決断だったらしい。

私たちにも白根山に行けないという更なる条件が付いてしまった。物事を決めて実行するということはまず現実を素直に受け入れることが肝要だ。

■地蔵の湯

草津町役場には何と温泉課という組織があり、草津温泉にある6つの源泉を管理している。その6源泉以外にも源泉があって、その独自の源泉を売りにしている旅館もある。

その6つの源泉で最も新しく湯量が多いのは万代鉱で、多くの旅館がこの源泉を引いている。万代鉱は95℃と高温なので熱交換システムを使って温度を下げ、各旅館や民家に供給している。熱交換システムにはもうひとつメリットがあって熱交換するのに冷水が必要でその冷水が熱交換の結果お湯になり、そのお湯もまた町内に供給している。町民は入浴する温泉と生活に使うお湯を同時に得ることができるから凄い。

さて私たちが泊まっている「ホテルニュー七星」は、地蔵の湯の近くなので源泉は地蔵の湯を引いている。この源泉は温泉好きにはなかなか評判が良い。泉温52℃というから熱交換はしていないが熱いことには変わりなく、地蔵の湯の共同浴場では時間湯を実施している。

時間湯とは草津温泉伝統の入浴法で、湯長と呼ばれる仕切り役が高温の湯に今から何分間浸かれ、上がれ、などと指示する。この時間湯が草津温泉の効能に寄与しているということドイツ人のベルツ博士が科学的に証明したということでも有名だ。(写真は共同浴場の外観と湯船)



■再生請負人

「ホテルニュー七星」は数年前におおるりグループ入りした宿だ。今回の長期滞在旅行では滞在費を安く抑えることができるので草津に3つあるこのグループの宿に泊まることが多い。

宿で夕食を取っていると支配人らしき60代くらいの男性が、「このジャガイモは旨いですよ」と勧めてくる。蒸かして塩をかけただけというシンプルな料理であるが食べてみるとなかなか旨い。ジャガイモそのものの味が良いからだろう。

その支配人らしき人に旨い理由を聞いてみると思いもよらない回答が返ってくる。

「そのジャガイモは私の田舎で作っているもので、今が旬だから旨いのですよ」と返ってくる。

私は驚いて「旨いのはありがたいですが、勝手に夕食に出せるのですか?」と問い直す。

「ええ、食べ放題の料理メニューは決まっていますが、多少の追加料理は認めてもらっています。」という。

「えー、どういうことですか、この地区のおおるりグループの宿はみな同じ料理ですよ?そ

れは支配人の権限ですか？」 どんどん質問が増えていく。

「私は支配人ではないのですが、実は特別の役目を仰せつかっており・・・」と続く。

その後の彼とやり取りをまとめると、彼は経営が上手くいっていない宿に対して、再建のために派遣されて1年間くらいかけて宿の経営を立て直していく仕事をしているという。そして彼はおおるりグループの社員ではなく、別の会社の社員だという。

いくなれば旅館・ホテル専門の再生請負人で、住み込みで従業員と寝食共に再生する。いや従業員は地元の通いが多いから、従業員以上に宿やお客に密着する。その目線から宿の設備、仕組み、料理、サービス、従業員教育など全てを改善するという。

彼が1年ほど前にこの宿にきた時はこの宿はおおるりグループ中でも最下位に近い評価であったという。

そして彼が最初に改善したのは風呂だ。草津温泉にお客が何を求めて来るのかを考え、地蔵の湯という源泉を最大限に活かすことから始めたという。具体的には湯船を2つに分けて熱い湯と温めの湯にした。草津はもともと熱いので熱い湯を求めてくるお客もいるが、ゆっくりのんびり湯に浸かりたい人もそれなりに多い。だからそういうニーズに対して町営の日帰り入浴施設である「大滝の湯」では熱い湯船から温い湯船まで5段階の温度で浴槽を分けている。

浴室の雰囲気も大幅に改良し清潔感と解放感を出しながら心地よく入浴できるようにリフォームしたという。それも限られた予算でのことなので自分たちで作業することも多かったという。

食堂のテーブルと椅子も食欲がなくなるような汚いものを新しい清潔なものに変更した。決して豪華ではないが、安くても清潔さを出すように心がけたという。

料理についてももちろんこだわりを持つようになり、そのひとつの例が自分の田舎のジャガイモになったのだらう。

そういうお客目線の地道な改善の結果、稼働率が上がり利益率もグループ内の他の宿の2倍近くになったという。恐るべき再生請負人だ。

最後に彼は「社長から次は〇〇へ行ってくれ」と最近言われたという。

やはり難しい仕事ほど出来る人にやって来るもので、難しい仕事を頼まれた時には自分は高く評価されていると考えた方が良い。そう考えることが難しい仕事を完遂する秘訣かも知れない。

■日本で最も美しい村連合

六合村と書いて「くにむら」と読む。その名から分かるように6つの集落が合併して1つの村を作った。六合村は草津町に隣接した広大な地域で大部分は山である。現在は中之条町と合併して村ではなく六合地区だが今も地元では六合村で通用するので、ここでも六合村を使おう。

その六合村は「最も美しい村運動」に参画している。この運動は国際的なもので、背景としては行き詰まりを見せてきた先進国の都市の成長モデルから脱却し田舎に新しい価値を見出そうというものだ。1982年にフランスで起こりヨーロッパやカナダに広がり、2012年に日本も加えた5ヶ国の協会で、「世界で最も美しい村連合会 The most beautiful villages of the World」が設立された。

日本の村々も「日本で最も美しい村連合」に加盟できるが、資格審査があり5年毎に再審査を受けなければならない。その審査基準はフランスの評価基準に日本の独自性を加味したものだが、コンセプトは高邁なものになっている。

「人の営みが生み出した美しさとその土地でなければ経験できない独自の景観や地域文化を持つこと、村人と都会の人との連携による共通体験こそが最も美しい村の価値を創造するという。」

うむ、なかなかのものだ。問題は具体的に何やっているの、ということになる。

5年毎の審査でそのコンセプトが守られているのか、そもそもその資格があるのか。

今回、私がそれを意識して見て回ることにしよう。

■紅葉の野反湖

六合村には野反湖という大きな湖がある。

2,000m級の山々に囲まれた周囲 12km、標高 1513mのダム湖で、その湖水はなんと信濃川に合流し日本海にそそいでいる。群馬県の湖が日本海にそそぐとは実に珍しい。関東地方の湖や川は太平洋にそそぐのが常識だ。それ程この湖は日本列島の尾根を形成する山脈の上方に位置しているということで、標高 1200m の草津温泉ではいまいちの紅葉もここでは真っ盛りになっている。

青く澄んだ湖に紅葉が映える。山の木々は全部が紅葉している訳ではなく緑の木々もあり、そのバランスも素晴らしく自然の美しさを実感できる。



湖の周辺には旅館も、土産物屋も、食堂もなく、案内所を兼ねたロッジで軽食がとれる程度である。自然と親しむには絶好の場所かもしれない。夏はキャンプ場がオープンし賑わいを見せるだろうが、今はそうでもない。

キャンプ場は管理が行き届いており設備も充実している。キャンプ歴 300 泊の私にとっては管理されていないキャンプ場の方が好きであるが、その辺は「最も美しい村」を意識してか統制がとれている。とにかくキャンプ場も湖の周辺も綺麗に整備されておりゴミひとつ落ちていない。

私たちは湖を眼下に昼食をとることにし、カセットガスのバーナーを持ち出してインスタントラーメンをコッヘルで作り食べる。そして食後のコーヒーを沸かして飲む。キャンプ道具が役に立つので自動車旅行にはこういう秘密兵器を積んでおくことをお勧めする。

キャンプ場にはいくつもバンガローがある。8人用にはロフトベッドもあって小さな子供のいる家族連れには最適だ。バンガローなので食事やトイレは外になるが設備も必要十分に用意されている。孫たちを連れて来たいと妻と話をしながら見学する。

ちなみにバンガローとコテージの違いは、キッチンやトイレが完備されたものをコテージと呼び、バンガローにはそれがない。



■チャツボミゴケ公園

草津温泉から約 10km、六合村のチャツボミゴケの公園がある。国の天然記念物に指定されている。この場所では 1966 年まで鉄鉱石の露天掘りによる採鉱が行われており、その露天掘りの窪みを「穴地獄」と呼び、チャツボミゴケという珍しい苔が生息している。

何が珍しいかというところの苔は強酸性の水が大好きで、穴地獄の随所から強酸性泉が湧出しておりチャツボミゴケに絶好の生育環境を与え日本最大級のコロニーになっている。

広さはサッカーコートの中ほどくらいで、黄緑色のチャツボミゴケが一面に生息している。



平安時代や鎌倉時代には露天掘りで掘られた鉄鉱石の色彩の良い赤色の部分はベンガラとして塗料の材料で重宝された。

今も茶褐色の露天掘りした跡が残っている。



どうしてこのベンガラを私が知ったかという
と、宿の風呂で知り合ったおじさんがベンガラ
の石を持ってきて私に自慢してきた。お陰でこのチャツボミゴケ公園を知るところになった。

旅人の自慢話には旅のヒントがあることを改めて知ることになる。自慢話、いや親切心かもしれないが、いずれにしても旅人の情報は有用なことだと覚えておくと良い。ただし鵜呑みにしないことも付け加えておこう。外れる事もしばしばある。

■趣ある太子（おおし）駅跡

第二次世界大戦中には鉄鉱石を輸送するために貨物専用の太子線という線路が作られ、戦後は旅客輸送も行われたが 1971 年に廃線となった。その積み出し駅の太子駅には、現在はホームやレール、鉄鉱石積込設備（ホッパ）の基礎部分や車止めが残されている。復元された駅舎も含め、実に独特の趣がある。



この駅の跡を見て思うことは、人間と鉄、鉄道の力、発展と衰退、人々の営み・・・等。
そして改めて感じることは、旅は歴史を教えてくれるということだろう。

鉄道ついでに、草津温泉にも鉄道が走っていたことを思い出す。草津と軽井沢の 55km を結ぶ草軽電鉄が 1962 年まで営業していた。その鉄道が今もあれば草津温泉へのアクセスは軽井沢経由になり、北軽井沢、嬬恋村のエリアは現在とは全く異なる光景になっていたに違いない。

■品木ダムは凄いことやっている

六合村には品木ダムという面白いダムがある。高さ 44m の重力式コンクリートダムでダムとしてはあまり特出したものではないが、凄いことをやっている。

このダムの上流にある白根山は硫黄を多く含んだ火山なので川は強い酸性になる。そして草津温泉も同じく強い酸性のお湯なのでこの一帯の川はみな強い酸性になっている。強酸性は温泉としては良いが、鉄やコンクリートをも溶かしてしまうので水として利用できない。これらの川の酸性度は PH2~3 と極めて高い。このまま強酸性の水を下流に流すと飲料水はおろか農業用水にも使うことができない。もちろん魚はすめない。生息できるのはチャツボミゴケくらいだろう。

そのためダムで堰き止められた人造湖は「上州湯の湖」と命名されている。酸性だけではなく温泉のような乳白色がかかった緑色になっているのも特徴的だ。

このダムでやっている凄いこととはこの酸性の水を中和していることだ。中和のためにアルカリ性の石灰を使用しているが、石灰を投入するとその沈殿物が残るので湖底の沈殿物をいつも重機ですくって排出している。



■道の駅は交歓の場

応徳温泉という温泉がり、そこに道の駅六合を中心に食堂、日帰り温泉、旅館などが集まっている。道の駅周辺は「村人と都会の人との交歓の場」になっているような気がする。

その中に「花まめ」という古民家風の小さな宿があるので見学をさせてもらおう。こういう時には名刺を差し出すと比較的すんなりと見せてくれるからありがたい。

部屋数 9 室という大きさ的には私の好きなサイズの宿である。古民家の木材を流用するなどの工夫がしてあり、木のぬくもりが暖かい田舎風の造りでありながら最新設備を入れバリアフリーという利便性に富んでいる宿だ。ある意味では田舎と都会の融合かもしれない。

案内してくれたの若い女性でテキパキとした対応でそつがない。名刺に女将と書かれていたので「オーナーですか」と聞くと「雇われ女将です」と返ってきた。確かにあの若さでオーナーは

資金的に無理か。しかし若い人に仕事を任せて、それを一生懸命こなす姿は実に気持ち良い。

ここはRVパークと呼ばれている日本RV協会が推進している施設もある。施設といってもRV (Recreational Vehicle) 用なので実態は駐車場で、キャンピングカーはもちろんのこと車中泊する人にも快適に安心して泊まる事が出来るようにトイレや温泉が利用できる。

隣接の食堂でうどんとキノコや野菜の天ぷらを食べたが、これがなかなか旨い。あまり知られていないが群馬はうどん文化で、ひもかわうどん、おきりこみ等のうどんが有名だ。



2日間ほど六合村を回り、改めて日本で最も美しい村連合のコンセプトを思い出す。

「人の営みが生み出した美しさとその土地でなければ経験できない独自の景観や地域文化を持つこと、村人と都会の人との連携による共通体験こそが最も美しい村の価値を創造する。」

美しい村、そんな気もしてくる。

■伊香保温泉

最終日は草津温泉から約50kmの伊香保温泉に宿をとる。ここはもはや草津の周辺ではないが翌日に所用があるので草津からでは間に合わずここに泊まることになった。

宿は「大江戸温泉物語・伊香保」で、おおるりグループと同じようなホテルグループだが、グループ全体でやや高い料金設定になっている。そのぶん設備や食事内容は充実している。それでも1万円程なので決して高くない。

実は今回この宿を選んだ理由は源泉である。伊香保温泉には2つ源泉があり、この宿ではその両方が楽しめる。茶褐色の黄金（こがね）の湯は昔からある硫酸塩泉で、無色透明の新しい白銀（しろがね）の湯はメタケイ酸泉である。そしてこの源泉で問題が起きた。

2004年に白骨温泉で入浴剤を使っていたという温泉偽装事件があった。各地の温泉でも調査が始まり伊香保温泉の一部の旅館で水道水を沸かして温泉と偽っていたという問題が発覚した。

昔は伊香保温泉の源泉は黄金の湯だけで、利用できる旅館は限られていた。しかし旅館数が増えて給湯量が不足してきたため近年になって白銀の湯が掘られたが、しかしこちらも枯渇を心配して供給量を抑えたために湯を引けなくなった宿が水道水を沸かし温泉としてしまった。

過度に源泉かけ流しにこだわる人もいるが、最近の多くの温泉は無色透明の単純泉で水道水との違いは消毒の有無くらいで効能はほとんど差がない。だから騙されないためには温泉成分表や自分の体感を重視することだろう。本当にいい温泉はやはり際立っているものである。

ついでに、温泉饅頭の発祥の地は伊香保温泉だという。それは黄金の湯の茶褐色に似せて温泉饅頭の色が茶褐色になったからだ。確かに日本全国どこでも温泉饅頭は茶褐色をしている。

さらについでに、白骨温泉で使っていた入浴剤は「草津ハップ」だったと付け加えておこう。

■一週間滞在の記録

今回の秋の一週間滞在旅行は2108年9月30日(日)から10月6日(土)の6泊7日で実施して、総費用は夫婦2人分で約93000円になる。詳細は以下のとおり。

1泊目と2泊目の宿は「ホテルニュー七星」連泊で4食付2人分22200円。

3泊目は今春にも泊まった「ペンション・マイウェー」で2食付き2人分13400円。

4泊目と5泊目は「草津おおりホテル」連泊で4食付2人分22200円。

6泊目は「大江戸温泉物語・伊香保」で2食付き2人分21444円。

宿泊費用は夫婦2人で79224円になった。その他食費とアルコールで約2500円、交通費として高速道路7129円、ガソリン代約2900円、チャップミゴケ公園入園料2人分1000円。

第四章 真冬の一週間

■寒波がやって来る

天気予報では来週から日本列島に寒波が到来すると言っている。そんな中を私は草津行のドライブの準備をしている。いよいよ明日から草津温泉長期滞在旅行の締めくくりの一週間が始まる。この旅の最初は今年の春で、既に年をまたいで2019年になっている。

草津温泉は標高1200m、なので冬は寒い。温泉がなければ過ごせるものではないだろう。だから冬は温泉の有難さや魅力が倍増する。それも厳冬期の1月下旬は格別だろう。

スコップやタイヤチェーン、冬タイヤの空気圧などの点検作業にいそしむ中、怖いもの見たさも手伝って、いつにも増して私はワクワクしている。

■コタツの似合う宿

初日の宿は「菊水荘」という小さな宿を予約してある。宿に着くと女将さんが部屋に案内してくれて、ポツリと「昨日は満室だったけど、今日はお客さんたちと常連さんひとりだけだよ。」と言う。真冬の日曜日の夜ということで宿泊客は少ない。

部屋に入ると布団が既に敷いてあって、窓際にコタツが用意されている。部屋は十分に暖かくなっておりコタツに入る必要はないが、私たち夫婦は日頃コタツの無い生活をしているので懐かしさも手伝って足を入れる。昔は冬といえばコタツ中心の生活をしていたので、そのぬくもりによって少年期に冬を過ごした自分の姿がかすかな記憶の中から蘇ってくる。

この宿はコタツがとても似合う。



風呂で先ほど女将さんが言っていた常連さんと一緒になり、早速いろいろ聞き始める。この宿には2カ月に1回くらいのペースでやって来るという。ここを常宿にしている理由はひとり旅でも週末に泊めてくれる数少ない宿だからだという。食事も気に入っており、家庭料理ながら味もボリュームも納得いくレベルだと自分の家のように話をしてくれる。彼はここ草津温泉以外にも長野の渋温泉、山形の蔵王温泉にも定期的に行っており、強酸性の硫黄泉が好きと言うから私の好みに似ている。だとしたらと思って、私が先週行ってきた福島の高湯温泉を紹介しておいた。

■若旦那と話す

「菊水荘」は旅館協同組合の案内所の窓口の女性から紹介された宿で「若旦那がいろいろ考えて実行している人で、話す面白いですよ。」と言っていた。その若旦那と話す機会が持てた。

草津の小さな宿では夕食の提供をしない B&B (Bed&Breakfast) の宿が増えている。

一般的な温泉地ではお客は宿を中心に過ごす。散歩くらいはするが基本は宿で、夕食も宿で食べる。何より宿以外に外食できる店が少ない。ところが草津は湯畑を中心に食事処も多く、若者や外国人客が増えてお客のスタイルが変化し始めている。お客は B&B に安く泊まり食事は自分の好みで選ぶ。いうなればフリースタイルだ。外食店もお客が増え料理で勝負できる。小さな宿にとって夕食の提供がなければ負担は大幅に軽減される。まさしく3者で Win-Win-Win だ。

だからといって小さな宿を B&B にすれば全て解決するという問題ではない。今日泊まっている常連さんのようにひとりでコタツに入って部屋でゆっくり食事をしたい人もいる。温泉旅館という日本のおもてなし文化は至れり尽くせりが基本だ。忘れてならないのは夕食がなくなれば収入減にもなる。常連さんや伝統を守りつつ負担軽減や収益確保も同時解決しないとイケない。

彼は、負担が非常に大きい繁忙期の夕食を何とか最適化を図りたいと言う。「繁忙期の最適化」というのがキーワードらしい。単純に B&B ではない別の道を模索しているようだ。

相反することの同時解決は世の中を画期的に進歩させ、皆が幸せになる。お手並み拝見だ。

近年急増している外国人旅行者への対応は年配者では困難なので、この宿では彼が一手に引き受けており、彼がいない時は完全に止まってしまうと危惧している。

彼の頭の中には草津の宿で棲み分けすることや、相互援助などの方策もあるようだ。ただ同様なことは全国の温泉旅館共通の悩みなので、情報を集めれば成功例はたくさんある。

私の経験からすれば言葉や習慣が違う外国に自ら旅行することで、手っ取り早く課題や対策が見えてくる。立場が逆転して外国人旅行者の目線で考えられるからだ。

集客ではインターネットへの依存は目覚ましく、じゃらん、楽天という予約専門サイト無しでは多くの宿ではお客が集まらない。しかし紹介料が高いため温泉旅館協同組合のサイトとの連携も強化して上手く共存を図っているという。

この話をもう少し詳しく書くと、予約専用サイトから予約し宿泊したら宿泊費の〇〇パーセントの紹介料を宿が予約専用サイトに払う。この紹介料は具体的には書けないがそれなりに高い。通常の商品の流通で例えば、小売店に払う販売手数料に相当するのである程度高いのは分かる。

ところが知名度が低い観光地や宿では、これら予約専用サイトからの予約が9割以上になっているところも多くあり、ここに頼らないと空室だらけになる。

そんな中でも草津温泉は全国的に知名度が高いため草津温泉のサイト「湯 LOVE 草津」、「ゆもみねっ」経由のお客も多いというからバランスが取れているらしい。

そんな話をしていたら、彼は空室のことを在庫と呼んでいる。

確かに旅館にとって空室は在庫と同じで、消費期限が切れたら1円にもならない。メーカーに勤務していた私は「在庫は罪悪」だと教えられていた。だとしたら在庫一掃セールを日常的に行う仕組みを作らないといけない。

私の知っている箱根の宿は空室がある程度発生する場合に、ほぼ半額で提供するメールがくることを彼に伝えると、彼の目が輝き始める。

いろいろ話をしたが、草津温泉は次の時代が変わろうとしている予感がする。

■吹雪の露天風呂

おおりグループの宿「ホテルニュー紅葉」には連泊する。昨日チェックインした時には、そんなに雪は降っていなかったが、昨夜から吹雪になっている。

この宿の風呂は大きな内湯と露天風呂があり、通常は内湯の温度よりも露天風呂の温度を熱めの設定している。内湯で体を温めてから外の熱い露天風呂に入るという入浴スタイルを想定しているのだろう。ところが外気温が低いので露天風呂の温度が下がり、逆転現象が起きている。

私は内湯で体を温めてから露天風呂へ出る。戸を開けると肌を刺すような風と雪が襲ってくる。しかし温泉で体を十分に温めた私の体はひるむこともなく、ゆっくりと湯に入り込む。それでもぬるいので熱い湯が出る源泉の注ぎ口のすぐ近くまで湯に浸かりながら体を移動させる。ようやく適当な温度の場所にたどり着いて落ち着く。

こんな吹雪の中に露天風呂に入るという酔狂な人は誰もいないので貸し切り状態だ。雪が横から吹き付ける中、温泉が私の体を温め続けているのが有難い。温泉 vs 吹雪という大自然の攻防の中にいるようだ。私という人間を吹雪の攻撃から温泉が守ってくれているようで何だか嬉しい。

あまり体験できない吹雪の露天風呂は、真冬の温泉ならではの良い思い出になる。

■西の河原（さいのかわら）公園

昨日の吹雪がおさまり、街に出たついでに西の河原公園を散歩する。この公園は私たちが泊まっていた部屋の眼下にあって、当初はただの草むらかと思っていたが川が流れて道もある。吹雪の中なのに上流を目指して何人かが歩いて行くのが見えたので少し興味を持っていた。

私はこの公園には何度も足を運んでいるが、いつも名物の大露天風呂に入りに来るだけでその上流に行ったことがない。

雪の坂道を歩く。昨日の吹雪が嘘のようで上空は青空が広がっている。周りの木々には吹雪の痕跡を思わせる雪が木肌や葉に多く付着しているが、青い空と白い雪とのコントラストが冬の日差しによって清々しく感じられる。

雪道を登って行くと降りてくる何人かの人たちと出会う。上に何かあるのだろうか、興味が湧いてくる。

公園は思ったよりも広い。東屋や池もある。池は凍っており雪に覆われていて危険なので立入禁止になっている。今まで遠くから見ていたスキー場がだんだん近づいてくる。

歩くこと数分、視界がいきに開けて広い車道に出る。そこには駐車場があった。

ここは夏に来た時にキャンピングカーを見かけたところだ。木造の家を軽トラに乗せたようなキャンピングカーだ。私はようやく位置関係を理解した。ここならば西の河原の大露天風呂に入浴する人たちも利用できそうだ。だからあのキャンピングカーはここで宿泊していたのだろう。



■草津の宿はさまざま

西の河原公園の入口にもどると、左に片岡鶴太郎美術館がある。

今回の長期滞在旅行は費用を安く抑えるのも目的のひとつにしているので格安の宿を選んでいるが、この美術館を併設する「草津ホテル」はすぐ隣にあり、この宿は高級宿に分類されるが比較的リーズナブルな価格で泊まれる。片岡鶴太郎の常宿でもあり、私が家族と毎年正月に訪れていた宿でもある。初釜では片岡鶴太郎本人がお茶をたててくれる。

草津温泉の情報誌をパラパラめくっていると「ホテル櫻井」がまた何か賞を受賞したと書いてある。多分このホテルが草津の中では高級で、最も有名なホテルだろうと私は思っている。

さらに最高級の和風旅館「つつじ亭」は知る人ぞ知る宿で、5千坪の敷地に10室というから凄い。

ついでに書くと、小さな子供を連れての宿泊は大変なので温泉旅行は敬遠されがちだが、子供が騒ぎ遊びまわること前提にしている「ゆたか」というユニークな宿もある。来年の正月にはやんちゃなになった孫たちを連れて来たいと思っている。

草津温泉にはいろんな宿があり、それこそピンからキリまでいくらでもある。

■人気の宿

今宵の宿「旅館たむら」は人気の宿で予約を取るのが難しい。小さい宿だから部屋数が少なく予約が取りにくいのだろう。今回の旅はこの宿の予約が取れた日に合わせて日程を組んだほどだ。

宿は湯畑から徒歩約3分の中心地にあり、大きな通りから入った静かな場所にある。

1874年（明治7年）創業という老舗旅館だ。現在の建物は鉄筋3階建てでエレベータの形式から察すると築50年くらい経っている。上手くリフォームを繰り返しており、落ち着いた和の雰囲気気に徹しており心地よい。客室は全部で14室、中心地なのに駐車場が14台分もある。客室の数だけあるのは偶然かもしれないが、その配慮が嬉しい。人気の理由が少しだけ分かった気がする。

風呂は男女別風呂が2つ、貸し切り風呂が2つ、同じくらい大きさの浴室が4つ並んで配置されている斬新なものだ。昨今の個人客ターゲットの旅館は貸し切り風呂が多い。

さらに斬新で徹しているのはB&Bの宿「花いんげん」で、見学させてもらおうとタイプの異なる4つの貸し切り風呂だけで男女別風呂がない。確かに貸し切り風呂を求めるお客は増えている。

「旅館たむら」は地蔵源泉のすぐ隣に位置している。源泉に近いから白い湯の花が浴槽の底に沈んでいる。源泉の多い草津でも地蔵源泉は評判が高い。館主に聞くと温度を低めに設定しているという。草津の湯は熱いという印象が強いが最近では温めをしている宿も多い。

夕食は部屋食で、宿の人がいくつものお膳を運んできて畳の上に並べてくれる。宿の人は私たちよりも明らかに年上で、だいぶ腰が曲がっている。そんな人生の大先輩に食事を運んでもらうのは気が引けるが、手慣れたもので2~3分でセッティングが終わる。

目の前に並んだ料理はというと温泉旅館としては極めて一般的なもので目新しさはない。いや、目新しさを求めてはいけないのかも知れない。

朝も部屋食、これは最近では珍しい。食堂がないという事情もあるかも知れないが、とことん和風旅館にこだわっているように感じる。



翌朝、風呂に入る。風呂の中でこの宿に来て初めて宿泊客に出会う。年の頃は私と同じくらいで間もなく定年退職をするので自分へのご褒美で草津温泉に来たという。

短い時間ながら色々な話をすることができた。彼は転勤族だったので日本各地を転々として、温泉地もそれなりに回ったという。しかし草津温泉は初めて、街も温泉もこの宿も大そう気に入ったという。湯畑の話になったので、私がデザインしたのは岡本太郎だと教えると、彼の反応からは驚きと感動が伝わってくる。湯畑に碑があることを教えると、早速いきたいと言っていた。

館主に外国人の割合を聞くと約半分だという。2階の部屋は全て外国人向けにしているという。高齢な従業員が多い中、上手く対応していると思う。慣れもあるだろうが和風に徹しながらも仕組みで工夫して、日本旅館伝統のおもてなしをしている。

■共同浴場巡り

本日は宿の近くにある共同浴場巡りをする。草津には共同浴場が 19 カ所あって地域住民が維持管理しているおり、全て無料で入浴することができる。

観光客のモラルの問題だろうが、最近は観光客が入ることができる共同浴場を制限している。ただあまり効果はないようだ。他の温泉地では有料にしているところや鍵を掛けるところもある中、草津温泉はそうになって欲しくないので感謝の気持ちで入浴することが肝要だ。

地蔵の湯、煮川の湯、千代の湯の 3 湯巡りをする。どの湯も泉質主義を貫いており、絶対に水で薄めないのだからやはり熱い。外は寒いが熱い湯を 3 つも巡ると体は芯から暖まり、まるで体の内部に温泉エネルギーの源が宿ったような気分になる。

その昔に会社の同僚たちと 1 泊 2 日でこれら共同浴場を全て回るという企画をして達成したことを思い出す。2 日間で 19 カ所はかなりハードで、初日が終わってヘトヘトなのに、夜はたっぷり酒を飲んで、翌日残りの湯めぐりして体がパサパサになったことを思い出した。あの頃は若さとか馬鹿さというものがあつた。

2 日間ではと言わないが、全部を回るというのはそれなりの意味があると思う。草津の温泉文化の全体や細部が体験でき、人々の生活を身近に感じることができる。

それにしても最近はそういう馬鹿なことをやらなくなった自分に気が付く。

■庶民的な食堂

今年の温泉女神が案内役をしている草津の小冊子でオムライスが評判の店と紹介されている「とり彦」に入る。店名が示すように鳥料理の店なので焼鳥丼が看板メニューらしい。その他にも定食やラーメンなどあるが、私は温泉女神お勧めのオムライス、妻は冬なので鍋焼うどんを注文する。

テーブルが 4 つくらいの小さな店だが小奇麗で品が良い。そのくせ庶民的な感じなので観光客だけでなく地元の人にも食べに来ているようだ。私たちが料理を待っている間にもそんな人たちが次から次へと来店してくる。



注文した料理が出てくる。オムライスはバターで炒めたケチャップライスが特徴で、昔懐かし味だ。この懐かしさゆえに地元の人にも人気があるのだろう。

こんな店が草津温泉にはたくさんあり、手軽に食事をとることができる。

宿と食の分離、若旦那の顔が浮かんできた。

■中華の人気店

翌日は湯畑前の中華料理の人気店「龍燕」に立ち寄る。ここは草津温泉を紹介するテレビ番組では必ず出てくる店で、私たちは湯畑に面している席に座る。2 階なので湯畑が一望できる。

湯畑をぼんやり見ているとタレントがテレビクルーを伴って湯畑に現れて撮影が始まる。お笑いコンビのカレッジセールと女性リポーターの3人が湯畑の周りで何やらレポートしている。しばらくすると湯畑を離れて光泉寺の階段を登って行った。

夏の温泉感謝祭で温泉女神が昇天し消えたあの階段だ。そして今、タレントもテレビクルーたちも消えていった。



テレビ撮影を見ていたら、若い男性店員が注文を取りに来た。スポーツマンタイプで気さくな感じがするので少し言葉を交わしてみると、これが思わぬ展開になる。

「この店の息子さんですか？」と私が口火を切る。

「いいえ私はアルバイトで、ここでサッカーをやりながらここでアルバイトをさせてもらっています。実はザスパ・クサツの選手なのですが、ザスパ・クサツを知っていますか？」と思わぬ言葉が返ってくる。

私は「もちろん」、さらに「ザスパ・クサツの語源は **The spa** 草津でしょう。草津温泉と言っているのと同じですよ。」とさりげなく言う。

その選手たちが草津温泉の旅館や商店でアルバイトをしながら練習をしていることも知っている。最近では「湯もみショー」に定期的に選手が出演して、中年のおばさんたちに絶大な人気を誇っている。何しろサッカーで鍛えた体を使って上半身裸で力強い湯もみをする姿は、もはやサッカー選手というよりもアイドルになっている。

そんなアイドルが、今私たちの目の前にいて注文を取りに来ている。私も多少興奮しながら彼からいろいろ聞き出す。彼は関西の出身で4年前に草津に来て今は25才、この店も草津も気に入っているという。湯もみショーの話を知ったら彼も毎週出演しており、今年入ってきた新人に今から湯もみを教えるという湯もみ練習があるという。彼はもうベテランの領域になるので後輩の面倒も見ないといけないようだ。

「アイドルグループの嵐も活動停止して彼らも次の人生に入るね。サッカー選手も世代交代とかあると思うけれど、今後のことは考えているの？」と突っ込んで聞いてみる。

「そうですね。25才だから考えないといけないですね。」と彼が言う。

「草津で永住なんか考えないの？」さらに聞く。

彼は真面目な顔で「居心地よいですからね、それも考えています。」と結んだ。

草津温泉が他の温泉地と決定的に違うのは、若者が多いということだと私は思っている。それは観光客にも働く人にも言えることだ。私の持論は、街や旅館そして若者自身が成長するためには若者が働く場所があって、やりがいある仕事を任せられるかということだ。

彼がその環境を手に入れることができるか。草津温泉への期待や興味は尽きない。

おっと料理の注文だ。人気メニューおかげしゅうまい、揚げ春巻、焼き餃子などを注文する。

■再生請負人がいた

おおるりグループの「ホテルニュー七星」に泊まる。夕食会場に行くと再生請負人がいる。彼は経営が上手くいっていない宿に派遣されて経営を立て直していく仕事をしている。だから私は再生請負人と呼んでいる。その彼が社長から次の場所に行くよう指示されたのは秋だった。

彼はもういないだろうと思っていたが、彼がいたので早速言葉を交わす。

「まだここにいたのですね、てっきり次の場所に移ったと思っていましたよ。」私が切り出す。

「荷物をまとめていたら社長から待たがかかりましてね。お客さんから嘆願書が出たので残れというのですよ。」と彼が言い、私が絶賛すると。

彼は付け加えて「草津が好きなので、私としては有難いですね。」と、照れ笑いを浮かべている。

舞台の方に目をやると屏風のようなものの前にオブジェが飾ってある。



屏風は要らなくなった障子を蝶番で合わせたもので、蝶番が少し曲がって付いており如何にも従業員の手作りというものだ。私にはこの手作り感覚がかえって親近感が湧いて気持ち良く感じられる。彼がここ1年程でやって来た功績のひとつだろう。

彼は常連のお客さんと談笑している。常連でないお客さんにも「〇〇が美味しいですよ。」などと声を掛けている。ちょうど私が前回来た時にそんな風に声を掛けられたのだと数カ月前のことを思い出した。

今回は私たちも少し親密度が増して、美味しい日本酒があると言って奥の方から飛び切りに冷えた日本酒を持って来てくれた。

■ハッ場ダム再び

草津から車で30分、春にも来たが再びハッ場ダムの建設現場に立ち寄る。

ダムは日本に約3000基ある。一番多いのは古典的な盛土をして作ったアースダム、次に多いのが重力式ダムと呼ばれるものでコンクリートの自重で水圧に耐えるのが特徴である。この2つの形式のダムで日本のダムの2/3以上を占める。その他には岩を積み上げたロックフィルダム、綺麗で芸術的なフォルムをしたアーチ式ダムなどある。(旅行記「宝川温泉の旅2018」参照)

ハッ場ダムは重力式ダムで堤防の高さ116m、長さは290mになる。堤高にしても貯水量にしても日本では50位くらいなので特出する大きさではないが、このダムを有名にしたのは民主党政権時に一度中止を宣言したからだ。そのため世間の注目を浴び見学者も多く、専用の展望台まで用意されている。さらに工事事務所主催の見学ツアーも定期的で開催されている。

私たちはその専用展望台に行ってみた。堤防を内側から見る場所なので完成すれば水面下になり、見ることができるのは今のうちだ。

いくつものクレーンや重機が動いて工事をしている。まるでSF映画で機械たちが勝手に動いて短時間で何かを作っているような光景が実に面白い。それを間近で見るとは圧巻だ。



■群馬県が映画を制作

草津町の隣に位置する中之条町に立ち寄る。

道の駅「霊山たけやま」に隣接してそば処「けやき」がある。ここには10割そばという看板に引かれて立ち寄った。道の駅でそば打ち体験ができて、それを食べるためにそば処があるという関係になっている。

道の駅で働く人にあそこのそばは美味しいかと聞くと、一瞬返答に困ったような顔をしたのが気になったが、10割そばの味もさることながら出汁の効いた麺汁がとても美味しかった。

そば処の店員にこの付近でお勧めの場所を聞くと「伊参（いさま）スタジオ公園」を教えてもらう。廃校になった中学校を1996年に公開された映画「眠る男」の撮影拠点として使用されたというものでこのような名前が付いている。

この映画は群馬県の人口が200万人を突破した記念で群馬県が制作した。日本では地方自治体初の映画制作であると話題になった。残念ながら現在の人口は200万人を下回っている。

映画は温泉の湧く山間の小さな町を舞台にそこに暮らす人々を描いた人間ドラマで、この地域にもってこいの設定になっている。主演は役所広司が演じている。残念ながら私はこの映画は見えていないが、ストーリーを読んでいるうちに是非観てみたい映画になってくる。

ちなみに役所広司という芸名は彼が俳優になる前に役所に勤めをしていたからで、その元役人を地方自治体初の映画の主演に抜擢したとはとても奇遇な話だ。

映画に使われた廃校になった中学校が目の前にある。木造2階建ての校舎は郷愁を誘いながらも威風堂々と建っている。

入場無料で一般公開しているのだが、冬季は残念ながら建物の中には入れなかった。それでも窓ガラス越しに中を覗くと教室には撮影に使った台本やスケジュール表が見える。機会を見つけて再度訪れたいが、それまでに映画を見ておかなければならない。



■草津の直し湯、沢渡温泉

最終日は中之条町にある沢渡温泉の「まるほん旅館」に泊まる。草津から外れてこの宿に泊まろうかと思った理由は2つある。ひとつは日本の温泉旅館100選というような本でこの宿の風呂が紹介されており、その名物風呂の写真を見て是非入りたいと思った。そしてもうひとつは沢渡温泉や四万温泉は草津温泉からの帰路に位置しており昔から草津の直し湯と呼ばれていた。強酸泉の草津温泉に比べて、沢渡温泉や四万温泉は弱アルカリ泉なので刺激を受けた肌をやわらげるという役割があったという。

沢渡温泉には群馬県医師会のリハビリテーション病院がある。これはこの温泉の泉質や温度が温泉療養の面で医師会からお墨付きをもらったということを意味している。

沢渡温泉には町民や観光客が多く利用する共同浴場があり、宿は小さな道を挟んでその共同浴場の隣にある。共同浴場は300円の入湯料がかかるが隣のよしみか宿泊者は無料で入ることができる。宿の名物風呂はその共同浴場と隣合わせで同じ敷地にあるので源泉は同じだ。

その名物風呂に行くには宿の2階から道の上に架かった渡り廊下を歩いていく。風呂場の入口は渡り廊下に直結しており地上高2mくらいのところにある。風呂場の真ん中の高いところなので戸を開けると空中廊下とも呼ぶような廊下があってその先の階段で下の脱衣場に降りるようになっている。だから廊下も階段も風呂場の湯気が立ち上る中にある。

風呂場の建屋の大きさは床面が10m×6mくらい、高さ4mくらいで、ひとつの大きな空間の中に簡単な脱衣場と湯船が2つあり、真ん中の上の方に空中廊下そして階段がある。比較的しつかりとは作ってあるものの木造なので、空中廊下や階段を歩くとギシギシという音がするのが何とも言えない風情を感じさせてくれる。

と、ひととおり書いたが、この風呂の構造やありさまを文字で説明するのは苦勞する。



名物風呂は混浴で、私が行った時には中年カップルが 2 組いた。2 組は山登りと温泉が好きでここで偶然知り合ったという。混浴であまり女性と会うことはないが、こんなこともあるのかと驚く。それならば私も服を脱ぐ前に妻を呼びに行き、みんなで混浴を決めこむ。

源泉は弱アルカリ泉で硫黄臭が少しする。優しい泉質でやや温めのお湯は長時間浸かれるので本当にゆっくりできる。

この宿には女性用の風呂もありこちらも評判が良い。名物の混浴風呂が女性専用になる時間帯があり、その時だけ女性用の風呂に男性が入ることができる。その時を待って私も入浴してみる。

窓はないが間接照明を巧みに使って落ち着きを感じさせてくれる。湯船の周りは木で、底は石で出来ている。底の 1/3 くらいは浅く曲線を描いたベッドになっており寝湯を楽しめる。

風呂場の上層部分は吹き抜けになっていて、曲線を描いて徐々に先が狭くなる独特のフォルムをしている。細くなった先からは明かりが入っている。

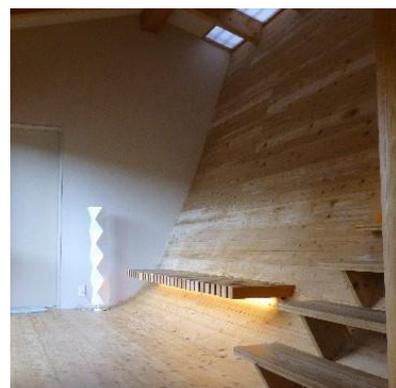
その吹き抜けに繋がる曲線部分が、風呂場のすぐ上にある 2 階の休憩スペースのベンチの背もたれを兼ねているという斬新なデザインをしている。

こちらの構造も文字だけで説明するのは相当に難しい。



左が風呂上層部の吹き抜け。

右が 2 階の休憩用ベンチで、この背もたれと吹き抜けの曲線が表裏一体になっている。



宿の主人の話ではこの風呂は日本商環境デザイン協会のデザインアワード 2016 金賞を受賞し、東大出の新進気鋭のデザイナーの作品なので将来価値が出るかもしれないと期待していた。

■温泉番付表

この旅館にも草津の大滝の湯で見たような温泉番付表が貼ってある。大滝の湯のものと西の三役と東の大関までは同じだが、西の関脇が伊香保温泉、小結が野州鹽原温泉になっている。ちなみに大滝の湯の方は関脇が那須温泉、小結が秋田小鹿嶋温泉になっていた。古い漢字や地名で分かりにくいのが、鹽原は塩原のことで小鹿嶋温泉は男鹿温泉のことである。

注目は明治 20 年 6 月 17 日という日付がある。私が推定した江戸後期よりもかなり後になっている。推定の根拠は明治 4 年に廃藩置県をしたからというものだったが、公式文書ではないので温泉の場所などは新しい県名よりの古い呼び名の方が庶民にとって分かり易いのだろう。そういう配慮をしないとイケなかったのだ。良い勉強になった。



■一週間滞在の記録

2109年1月27日(日)から2月2日(土)の6泊7日、総費用は夫婦2人で約116000円。

昼食代7140円。交通費約9450円(高速道路5950円、走行距離約450kmでガソリン代約3500円) アルコール代は約2000円。宿泊費97410円は、詳細は以下に示す。

- 1 泊目は「菊水荘」に2食付きで2人分19000円。
- 2 泊目、3 泊目は「ホテルニュー紅葉」連泊で4食付2人分22200円。
- 4 泊目は「旅館たむら」に2食付き2人分21300円。
- 5 泊目は「ホテルニュー七星」1泊2食付き2人分12610円。
- 6 泊目は沢渡温泉の「まるほん旅館」で2食付き2人分22300円。

終章 振り返りと今後

■ベストシーズン

草津温泉のベストシーズンが選べないので春夏秋冬と4回に分けて訪れたが、四季を体験した今になってもいつが一番良いのか、答えにたどり着いていない。四季はそれぞれに素晴らしい。

妻と話をすると、一週間の草津温泉滞在旅行は非常に良かったのでまた行こうとなった。

問題はそれが一体どの季節になるのだろうか。

おそらく私は今まで行っていない季節を選ぶような気がする。春夏秋冬といっても所詮一週間なのでその間の季節は体験出来ていない。まだ知らない草津温泉がたくさんある。

そしてきっと滞在旅行を繰り返しても、ベストシーズンは選べないだろう。それが草津温泉の魅力なのかもしれない。

■地元体験

当初の長期滞在旅行の目指していたものに対して実際がどうであったかを簡単に検証して、今後の対応について簡単にまとめてみる。

1) 地元の食材で料理

当初考えていた地元の食材を調達し料理したことは1回しかない。理由は既にかいたが夫婦での自炊は日常生活そのものだと分かったからだ。そして群馬県出身の私たちにとっては食材も目新しくない。コストで論じるならば最近では2食付きでも格安宿がある。

今後のヒントとしては、食べたい食材があれば臨機応変に対応できるように簡単なキャンプ用の調理器具を持参するのが良い。車で出かければ野外でインスタント麺なども作ることができる。

2) 食べ歩き

食べ歩きは一応何軒か足を運んだ。ただ今回の旅行以前にも私は草津をたくさん訪れており、その時に行った店については当然触れていない。

皆さんにおいては、草津で食べ歩きに便利なパンフレットが昼の部と夜の部それぞれ用意されており、これを利用することをお勧めする。

3) 周辺観光

草津温泉は過去の訪問回数が多いので街の中の観光には手を抜いた感があるが、周辺の観光や探訪はそれなりに充実していた。

長期滞在旅行に限らずだが、優先順位をつけて事前にいくつか訪問候補地をつけてリストアップしておくといい。

4) スポーツやイベント参加

残念なのはスポーツをしなかったことだ。ゴルフはメンバーが必要だが、ウォーキングやトレッキングならば2人でも可能なので装備を含め計画段階で組み入れることだろう。

現地の地域イベントの参加も温泉感謝祭のみで心残りだ。これも出発前に日程を組む段階でイベントの情報収集をすることが肝要だろう。

5) 費用

長期滞在旅行の滞在費の目安を1人10万円としていたが、現実には約2倍だ。総費用は2人で約389000円、平均では一週間2人で約97300円だ。

この中で宿泊費は春61800円、夏73180円、秋79224円、冬97410円と推移しており、徐々に高くなっている。1泊平均は1人約6500円だが春5150円に対して冬8118円になっている。その理由は、当初は積極的に安い宿を探していたが、そのうちにどの宿に泊まりたいという志向が入ってきたことだと思う。

しかしこれで良かったと思う。何もなければ安い宿がいいが、泊まりたい宿があるならばそれを優先した方がよい。予算が許せばの話だが、これは旅行で宿を選ぶ大原則だろう。

1ヵ月の滞在費は平均の6500円で計算すると約19万円、春の5150円でも約15万円になる。10万円にこだわるならばできない数字ではない。安くあげることが重要だが、目的はそれだけではないので本質を見失ってはいけない。特に今回は初めてなので少し様子を見たい。

夫婦ふたりで一週間10万円、どの季節も草津温泉を十分に楽しむことが実証できたと思う。

■草津の未来を描く

湯畑には岡本太郎の碑がある。そこには彼の思いが起承転結の文章で書かれている。書かれたのは1975年頃だ。造詣が深く、世界的芸術家なので常に世界を目ている。私の思いにも重なるものがあるので、起承転結に要約して記載する。

【草津の未来を描く】

- 起) 現代人の生活は生産・労働では満たされず、レジャーや観光が世界的にも急速に発展する。
- 承) 草津には無限の可能性があり、健康や人間解放で心身をよみがえらせる条件がそろっている。
- 転) 草津の現状は十分にそのよさを生かしていない。古くから栄えた町ほど取り残されるが、草津はそうあってはならない。



- 結) 草津は日本全体の新しいレクリエーションセンターとして大きく発展すべきだ。その魅力が世界中の人々を惹きつけ、世界の草津となるような大きなビジョンをもって町づくりを進めるべきだ。 岡本太郎

